

第九二三回 (1月30日)

徐福東渡出航地と

到達地について

— 徐福伝説を探る —

教授 田島孝子

(神奈川徐福研究会会長)



教授 伊藤健二

(神奈川徐福研究会会員)



前漢時代に書かれた司馬遷の歴史書『史記』によれば、徐福は秦の始皇帝(BC221年國家統一)の命により、東方の海に不老不死の靈薬を取りに行った。3000人の童男童女(若い男女)と百工(多くの技術者)を従え、五穀の種を持って、東方に船出したが、平原広沢(広い平野と湿地)を得て、王となり戻らなかった。徐福の東渡

は、初めから始皇帝からの亡命を意図したものだと考えられている。

中国では研究が進み、徐福の故郷が明らかとなり、また徐福の出航地の伝承も各地に残されている。中国ではこれらの地域を、公園として整備し、立派な徐福像を建立し、徐福に関しての国際シンポジウムを定期的に開催している。

また、日本には、和歌山県新宮市、佐賀県佐賀市、山梨県富士吉田市、福岡県八女市、三重県熊野市など、各地に徐福が来たという伝説が残されている。伝説の内容は様々であるが、徐福が養蚕、農業などの先端技術を伝えたというものが多く、神社に神として祀られている。墓が造られている。現在は自治体も加わって徐福伝説の継承を行い、市民も関連行事などに参加している。

徐福が本当に日本に来たのかどうかについては、徐福の時代が卑弥呼の時代から400年以上前、古事記、日本書紀から900年以上前であり、歴史的には確認できない。しかし大陸から各種の文化の伝播、弥生人の骨等の考古学的な研究などから、人が朝鮮半島だけでなく、中国大陸から直接来たことが明らかにされ、「徐福」個人が来たかどうかは別として、この時代の大動からの人の移動は歴史的な事実である。

一方、残念なことは、徐福とユダヤ人と結びつけ日本人の祖先としたり、徐福一行は物部氏だとしたり、徐福は神武天皇などと、歴史を無視した書物もあり、これが一般の人が徐福をうさん臭いものとして敬遠する理由の一つとなっている。現在各地に徐福研究会が設立されているが、徐福は日中友好のシンボルとされ、厳しい関係にある日中友好に役立てられている。

特定非営利活動法人 東京雑学大学 紹介

地域住民に生涯学習の機会を提供し、人づくりにより、まちづくりに少しでも貢献することを目的としています。

活動は、毎週1回の講義(年間50回)・年3回の「学報」発行、年1回の開学記念行事(特別講演会やシンポジウム)、工場や美術館などの見学を行っています。